

◆特集◆「つながりから生まれる新たな知」
文科省プロジェクト

文科省「大学等を通じたキャリア形成支援による幼児教育の『職』の魅力向上・発信事業」で下呂市・高山市を訪問して

名古屋市立大学大学院人間文化研究科 天谷祐子・上田敏丈・清水千里

1.はじめに

本稿は、大阪教育大学が岐阜県の飛騨地域で展開する事業（注1）において、名古屋市立大学の天谷・上田・清水が参画した2つの企画の内容を報告するものである。

2つの企画とは、10月19日の高山市での高校生と大学生の交流を中心とした企画と、10月20日の下呂市での幼児から高校生までの地元のイベントに大学生や大学院生も参加した企画である。

以下に、まず、その準備段階の大学間交流と高校と大学のオンライン交流の様子を紹介し、そのうえで、上記2つの企画の概要と、そのなかでうかがえた高山・下呂の高校生のキャリア探索についてまとめる。

2.企画実施前の大学間交流・高大交流

10月19日・20日の企画実施前に、文科省事業の申請代表者である大阪教育大学戸田有一氏と名古屋市立大学の天谷・上田、両大学の院生と学部生の間で複数回交流する機会が設けられた。2024年6月に、天谷担当の大学院授業に戸田氏がゲストスピーカーとして登壇し、幼児教育に携わる社会人院生からの質問に回答したりディスカッションをしたりした。また7月下旬にはオンラインにて戸田氏とゼミ生、天谷・上田と大学院授業の受講者・ゼミ生が顔合わせを行い、事業の説明や今後の展開のあり方について交流した。

8月下旬に、戸田氏に天谷が帯同し、岐阜県立益田清風高校を訪問し、教頭先生と保育系列の先生と意見交換や打ち合わせを行った。益田清風高校の保育系列の高校生は、下呂市複合型子ども・子育て支援拠点施設「ニコリエ」等の指定管理者である「サン・はぎわら」が運営する認定こども園での実習・交流を定期的に進めており、8月の訪問時には、10月に認定こども園で開催されるイベントの出し物のゲームをどのように作成するかを考え始める段階であった。打ち合わせから一週間後、高校生と天谷・上田・清水がZoomにて交流を行い、ゲームのアイデアに関わる意見交換を行った。最終的に、Zoom交流中に出たアイデアだけでなく、生徒の取り組みの中から多様なアイデアが出て、それらを組み合わせたゲームが完成した。10月のイベントでは子ども達が楽しんだと保育系列の先生から教えていただいた。

3. 高山市・下呂市での企画の概要と高校生のキャリア探索

1) 企画の概要

10月19日は、高山市の「村半」（高山市若者等活動事務所）にて、岐阜県立斐太高等学校の高校生と大阪教育大学の学生・名古屋市立大学の院生、高校・大学の教員が集まり、懇談的な交流がなされた。会場となった「村半」は、斐太高校の先生や管理者の方の話によると、若者等活動

事務所として改修されるにあたり、中学生・高校生の意見も反映され、設立後は中学生・高校生が学習や遊ぶために利用しており、地域の若者の居場所として機能しているとのことであった。

参加した斐太高校生の話からは、高山の街を誇りに思っており、外部から高山を訪れる人に高山の良さを知ってほしい様子がうかがえた。一方で、飛騨地域には4年制大学が一つもないことから、進学にあたり自宅から離れた高等教育機関を選択するしかないようであった。

10月20日は、下呂市の「ニコリエ」にて、退職された中学校理科の先生が中心となり、子ども向けの「わくわく科学体験教室」が開催された。退職された理科の先生、現職の理科の先生、ボランティアの中学生と高校生(益田清風高校の保育系列の高校生も参加していた)、参加者の子どもとその親、大阪教育大の学生と戸田氏、名古屋市立大学の院生と天谷・上田等が一堂に会した。科学体験教室のまとめ役の先生のお話からは、以下のようなことがうかがえた。①立ち上げや定期開催にあたり、コミュニティスクール(学校運営協議会を設置した学校)を利用し、下呂市内の中学校や校長先生とのやり取りを密にしながら中学生ボランティアの募集を行った。②ボランティアの成果を中学校にフィードバックすることで、ボランティアに参加した生徒が学校で評価される循環を生み出した。③中学生ボランティアに相手をしてもらった子ども達が、その後中学生になった時にボランティアとして参画する循環も生み出され、やがて高校生も参加するようになった。④現職の先生が関与していることで、中学生・高校生が教職を意識する場合もある。

ボランティアとして参加している中学生・高校生の、小学生や幼児とのかわりは、「きょうだい」まではいかないが、「近所の子ども」に接しているような振る舞いが特徴的であった。「押さえているから、ここの所を自分で切れる?」「うん」「できたね。うまいね。よし。」といった自然かつ絶妙な掛け合いがそこかしこで展開されていた。子どもとの心理的距離が近く、日常生活の延長として自然体で子どもと接していた。大学生・大学院生が他地域のやり取りを見ることは、自身のやり取りの相対化につながると思われる。

また、子どもへの声かけのあり方や場の運営のあり方も、多層的であった。例えば、中学生が中心的に参加者の子どもに働きかけ、中学生が行き届かない部分を高校生がフォローしていた。そして取り組みの楽しさや工夫のしどころについて、現職の先生がユーモアを交えて声かけをしていた。各立場の人が、他の立場の人の振る舞いを目の当たりにすることで、他の立場の人の上手くできない部分や、自身にはない新しい視点を、身をもって知る機会となっていた。さらに今回の企画では、それらのやり取りを大学生が俯瞰しながら記録しており、その様子を高校・大学の教員が観察する構造であった。

科学体験教室開催後、高校生と大学生の交流会が開催された。高校生が自身の将来への展望を大学生に語り、大学生が現在の学びを高校生に伝え、また大学生が自身の高校生時代の考えや展望をフィードバックすることで、両者の交流が展開された。

2) 高山市・下呂市の高校生のキャリア探索

今回の企画のなかでの高山市と下呂市の高校生のキャリア探索からうかがえることを、世代間交流と居場所の機能という2つの観点で述べる。そのうえで、本事業の目的であった「幼児教育の「職」の魅力向上・発信」に絡めて述べる。

(1) 世代間交流

科学体験教室の取り組みは、異なる世代(幼児、小学生、中学生・高校生、大学生、大学院生、教員)が同じ場を共有しやり取りをすることで、各世代自身のやりがい・目的を満たすだけでなく、

その後の人生の見通し(広い意味でのキャリア)に関する具体的なイメージを醸成する機会となっていた点が特徴的であった。この点は下呂市ならではの特徴である。都市部は人口規模が大きすぎるために、同じ世代内の閉じた取り組みになりがちである。都市部においても、公的立場にある団体が何らかの工夫をしながら、異なる世代が同じ場を共有できる仕組み作りが求められる。

都市部では、中学生・高校生の生活圏に大学生も生活しており、インフォーマルな形で異世代間交流が展開されている。中学・高校生がお店に行けばアルバイトの大学生がいる。また学習塾には大学生アルバイトの先生や事務担当者がおり、勉強を教えてくれるだけでなく、大学生活の実際や大学での学習内容を雑談から知ることができる。また、どのような専攻だとどのような職につながっていくかといった具体的なキャリアに関わる話を聞く機会もある。このような都市部のインフォーマルな異世代間交流は、大学のない地域では難しい。今回の企画により、大学のない地域に足りない世代である大学生・大学院生世代が加わった。インフォーマルではなくフォーマルに近い形であるが、大学生・大学院生世代と中学生・高校生が実際に交流することにより、中学生・高校生が将来展望・大人になることへの具体的なイメージを持つ機会となったと思われる。

一方、都市部の大学院生や教員にとっても今回の企画から得るものがあった。都市部の中学生・高校生にとってボランティア活動はそれほど身近ではなく、非日常に近い取り組みとなりがちである。天谷ゼミの学生からは、中学・高校時代にボランティア活動をしていたという話を聞いたことがない。幼児教育に興味のある学生の中のごく一部に、中学・高校時代にボランティア経験があると話す学生がいるが、その回数は数回程度である。今回の企画は、都市部の中学生・高校生に対して、日常生活の延長上にボランティア活動やフォーマルな形での異世代間交流の機会を生み出していく工夫について考える出発点となった。

(2)コミュニティをベースとした地域への愛着・居場所の有無

下呂市や高山市は、行政と学校、地域住民の間の距離が近く、やり取りが密になる。高山市では小学生や中学・高校生であっても、地域の施設の運営に自ら意見を表明し、自分たちの利用しやすい施設を作ろうとする視点があった。そして施設が運営されるようになった後も、予約なしで無料で、利用したい時間に利用できる居場所となっていた。下呂市においても、中高生が学習やボランティアのために「ニコリエ」を利用していた。地域への愛着や居場所感、自分たちで自主的に何かをしようとする意識が、下呂市や高山市の中学・高校生に見られた。

同様のことを都市部で行うには、人口規模が大きすぎて非現実的である。しかし都市部でも利用者のターゲットをさらに絞ることで、類似の取り組みは実現可能かもしれない。地域への愛着や居場所感を得て、自主的に何かをしようとする意識は、都市部の住民にも必要である。特に自主的に何かをしようとする意識は、キャリア探索や自己探索にとって非常に重要な姿勢である。また実際に職を得て生活をする地域を考えるにあたっても重要な視点である。この点を都市部の中学・高校生に醸成していくには、子ども時代から高校時代までの間にコミュニティを意識してもらう工夫が必要である。このたび、都市部在住の大学生・大学院生が下呂市や高山市の中学・高校生の姿を見ることで、新たな視点を得る気づきになったと思われる。

(3)中高生への幼児教育の「職」の魅力発信

本プログラムの主たる目的は、「幼児教育に関わる『職』の魅力向上・発信」である。近年、少子化の影響だけではなく、幼稚園教諭も含めた学校教員の労働環境に関するネガティブな報道ばかりがなされるなかで、幼児教育に関わる職や教職に対しての就業意識が低下し、それが人材不

足を招いている要因の一つでもある。従来、幼児期の教育（幼稚園や保育所等）に対して、18歳が選択する理由は、「こどもが好きだから」「かわいいから」といった素朴なイメージに基づくものが多かった。所得も多いわけではないため、幼児教育に関わる職は、いわば「結婚するまで」「出産するまで」というキャリア途中での退職を前提として選ばれることが多く、小学校等の教員に比して、ライフワークになりにくいものであったといえよう。

このような現状に対して、幼児教育に関わる「職」の魅力向上は、実体験を土台とした語り合いによる経験の転移によって、その魅力を伝えていくことが重要である。中でも、園長や主任といった中高校生からみた保護者世代ではなく、近い世代の大学生が、自身の実習や大学での体験を通して、幼児教育に関わる「職」の魅力を伝えることで、リアルな実感として伝わっていくことに繋がるだろう。このことが、中高校生にとってみると、自身の身近なキャリアラダーをイメージすることにつながり、将来的に幼児教育に関わる「職」に繋がっていくことが期待される。

今後、さらに本事業が展開されるのであれば、さらにその先のキャリアラダーである若手の幼稚園教諭や中堅の幼稚園教諭との語り合いも、また有効に機能すると考えられる。



Figure. 高校生と大学生の語り合い(10月19日「村半」にて)

4.まとめ

事業に参画したことで、都市部の大学生・大学院生や教員が、高山市や下呂市の中高生やコミュニティを形成している大人の姿から学び、また高山市や下呂市の中学・高校生やコミュニティにとっても、都市部の大学生・大学院生や教員により日常にない機会が提供され、双方に得るものがあつたと思われる。幼児教育に携わる多様な世代の参加者が、キャリア形成に関わる様々な視点を同時に得ることができた。自身の所属や身のまわり「以外」の同輩や先輩、先生との「生身」の出会いは、キャリア意識の具体化に資する。高校生は進学後の姿を知ることにつながり、大学生は自身の初心を思い出すことにつながり、新たな意味づけがなされる機会となったと思われる。

また都市部では、高山市や下呂市では日常的な、コミュニティをベースとしたキャリア探索が難しいこと、学校や公的機関以外の取り組みにて情報不足を補う機会が多いことに気づかされた。一方高山市や下呂市では、学校や公的機関の取り組みの重要度が相対的に大きいことがわかった。今後も高山市や下呂市をはじめとした地域と都市部の交流が定期的になされることが望まれる。

注1) 文部科学省の令和6年度「大学等を通じたキャリア形成支援による幼児教育の『職』の魅力向上・発信事業（「職」の魅力向上と人材確保の好循環を生み出すモデル創出事業）」に大阪教育大学が「土曜日の集中講義での多層型交流によるキャリア支援ネットワークの構築（及び、養成校の共同による高校の保育コース等への出前授業「進路展望プロジェクト）」として応募し、採択された事業。